

# 観光建設水道委員会行政視察報告

観光建設水道委員会委員長 穴井 宏二

- 【視察日程】 令和6年10月16日（水）～18日（金）
- 【視察委員】 穴井 宏二 委員長、小野 正明 副委員長、  
石田 強 委員、美馬 恭子 委員、森 大輔 委員、  
加藤 信康 委員
- 【視察地】 福井県敦賀市、岐阜県大垣市
- 【調査事項】 敦賀観光協会：「サステナつるが」について  
岐阜県大垣市：「まちなかテラス」について

## 1 「サステナつるが」について

視察先：福井県敦賀市（敦賀観光協会）

### (1) 概要

「サステナつるが」とは、敦賀でしかできない特別な観光体験。

「観光客に、敦賀に癒されて、敦賀に癒してもらうことで、敦賀の魅力を持続可能なものにする旅プラン」をコンセプトに敦賀ならではの旅コンテンツを提供している。ツーリストは、次の3つのプランから、体験を選択する。

➤ おぼろ昆布手すき体験

北前船が育んだ敦賀の名産物おぼろ昆布。職人と一緒に行くおぼろ昆布手すき体験、そして、すいた昆布を実食する体験。

➤ 敦賀真鯛の一本釣り・捌き体験

敦賀のブランド魚「敦賀真鯛」を専用の釣り堀で釣り体験。そして、釣った魚をその日のうちに捌いて食べることもできる。

➤ クリーンビーチ・アップサイクル体験

敦賀の海をビーチクリーン。拾ったごみを使ってオリジナルの小物づくりを行う。旅+環境保護を学ぶ体験。

### (2) 背景

2019年、福井県は認知度、アクセス面の悪さから訪日外国人訪問客数が最下位クラスであり、さらに、新型コロナウイルス感染症により、敦賀市の観光入込客数や商業・漁業に多大な影響が及んでいた。一方、2024年北陸新幹線敦賀駅開業への期待は高まっていたが、旅の目的地となるような目玉となる観光コンテンツが存在しなかった。

そんな中、特色ある「敦賀独自の海」に着目し、観光庁の補助事業「地域独自の観光資源を活用した地域の稼げる看板商品」を活用し、職人・生産者から直接教わる、敦賀ならではの普段できない付加価値を伴った体験交流コンテンツを創出。

### (3) 実施主体

- 株式会社マップトラベル（地元の旅行会社）・・・運営
- 一般社団法人敦賀観光協会・・・企画協力（企画開発、広報支援等）

### (4) 主な質疑応答

Q 1：事業実施にあたり、地元住民や事業者とはどのような協力をしていますか。

A 1：新型コロナウイルス感染症をきっかけに、地域の中でこれからどのようになりわいを続けていこうか、というような話をしてきた。そのため、事業実施の際には、交渉もスムーズに進められた。実際は、自走していくには難しいこともあるが、現在は採算を度外視で手伝い等をしている。また、コンテンツの活用方法が分からない事業者のサポートなども行っている。

Q 2：新たな観光体験の開発を考えていますか。

A 2：令和6年4月に新たな観光体験として、自身の体調をチェックし、状態に合わせたお茶を選び、ブレンド茶をつくる体験「オリジナルブレンド茶づくり体験」を実施した。この体験は事業者の提案から作り上げた観光体験。現状、開発よりも既存のコンテンツを活用していくことに重きを置いている。

Q 3：おぼろ昆布すき体験は好評でしたか。

A 3：敦賀は伝統工芸があまりないが、その代わりに他にはない歴史のある伝統産業の体験として好評である。職人さんと体験者との技術の違いを楽しんでもらえている。

Q 4：敦賀一金沢間の新幹線が開通しましたが、東京からの観光客は増えましたか。

A 4：東京からの観光客も増えたが、メディアに取り上げられたことにより、中京・関西方面からの観光客が増えた。埼玉、長野は近くなって増えた印象を受ける。

### (5) その他

- 敦賀は市・商工会議所・観光協会の横の連携が強い
- 敦賀に寄港するクルーズ船の観光客の六、七割は旅行会社のオプションのツアー。残りの観光客には行政がシャトルバスを出し、まちなかへ人を運んでおり、そのような方に観光体験を提供している
- 協会としては、ホテル旅館や温泉施設等の各業種からのパーツ（コンテンツ）をとりまとめて、コースを作っている
- 敦賀には海があるが、近隣の山しかない市町村と手を組んで「宿泊してもらおう」広域観光を検討している
- 早朝イベント等の「宿泊してもらおう」ための理由を考えていかなければならない

## (6) 視察の成果（視察参加者の考察）

### ◆ 穴井 宏二 委員長

#### 《目的》

2024年の春に北陸新幹線の敦賀駅までの延伸が実現したことにより、外国人観光客が増えることが予想され、これまでのお土産を多く買うことから、観光地の体験をお土産とする体験型観光を重視した取組を調査。

#### 《内容》

新型コロナウイルス感染症が、敦賀市の観光客入込客数の減少や商業、漁業に影響を及ぼしており、特に外国人観光客数においては、全国46位と低迷していた。北陸新幹線の敦賀駅開業にかける思いも強くこの好機を見逃すまいと、地元の観光資源の磨き上げに力を入れており、周遊観光だけではなく、体験観光、「おぼろ昆布手すき体験」「敦賀真鯛の一本釣り・捌き体験」「クリーンビーチ・アップサイクル体験」などを実施している。

#### 《成果（考察）》

観光体験の実際の動画を紹介されながら、連携をしているマップトラベル様と共に説明を頂いた。「敦賀独自の海とは何か？」を共に考え、地場産業の「おぼろ昆布の手すき体験」なども人気を集めており集客に効果を上げ始めているとのことである。今は「人道の港 敦賀ムゼウム」を活用した修学旅行の一環として教育旅行にも力を入れている。市内、市外、県外からも来ており効果をあげている。

今後は、健康に良いブレンド茶づくりや市内銭湯や温泉施設活用による長期滞在への取組「海がない山がある自治体」などとの連携を模索しているとのことであり「サステナつるが」とテーマを掲げている取組は大変に意義あるものであった。

### ◆ 小野 正明 副委員長

「サステナつるが」とは株式会社マップトラベルが運営し、敦賀観光協会が企画協力をするプランで敦賀でしかできない特別な体験を持続可能な形で体験してもらうというプラン。観光面の課題として、コロナ禍により観光入込客数や商業・漁業に多大なる影響が発生していたこと、目玉となる観光コンテンツが存在しなかったことがあった。福井県は認知度、アクセス面の悪さから訪日外国人数が最下位クラスであった。そこで2021年に観光庁の「地域独自の観光資源を活用した地域の稼げる看板商品の創出事業補助金」を利用し、1. おぼろ昆布手すき体験、2. 敦賀真鯛の一本釣り捌き体験、3. クリーンビーチ・アップサイクル体験と3つの体験型商品を開発。2022年には台湾からの誘客事業にも積極的に取り組み、2023年にはインバウンド戦略として観光庁の補助金にも応募し、新たなコンテンツ造成に力を入れている。

### ◆ 加藤 信康 委員

敦賀市の特徴として自然に囲まれ海路、陸路、新幹線を含む鉄路など交通の便が良く住みやすいまちだと感じる。観光に特化した自治体ではないが、歴史もあり、クルーズ船も数多く寄港することから将来的にインバウンドも含む観光客の増加

が見込まれる。また、原発立地による財政への貢献も住みやすさを補完していると思う。

静かな町だからこそ、単に何かを見るだけの観光ではなく、まちの特徴を体験型の観光商品として提供できる体制に羨ましさを感じる。そういう中での体験型観光の推進は的を得ていると考える。

別府市もこれまでどおり見る観光に加え、まちや地域の特徴や文化など、体験型観光施策をさらに強力に進める必要性がある。

◆ 森 大輔 委員

敦賀市は自然豊かで文化・歴史が深く、インフラ面では海路、陸路そして新たな北陸新幹線の開通などにより、とても魅力あふれるまちである。しかし、コロナ禍により観光入込客数や商業・漁業など第1次産業及び第2次産業に多大な影響が発生していた。また、旅の目的地となる観光の目玉コンテンツが少ないことから、見る観光から体験型の観光に切り替えて、敦賀ならではの付加価値を伴った体験型観光コンテンツの創生に向けて取組は別府市でも推進されたい。

◆ 美馬 恭子 委員

サステナつるがーコロナ禍は観光・商業・漁業に大きな影響を及ぼした。その後、どのようにしていけば観光が、まちが発展していくのかを考えながら実施。

観光庁の「地域の観光資源の磨き上げを通じた域内連携促進に向けた実証事業」から始まった。福井県の中でもなかなか人が立ち寄らない地域、ここにどのようにして観光客を呼ぶのかが大きなポイントだった。そこに、2024年の北陸新幹線の開業が大きかったと言うことだった。

関東圏からも直接行くことができ、時間的にも早くなったのが良かった。

「昆布かき体験」「敦賀真鯛の一本釣り」「ビーチクリーン」の実施は、観光協会のみではなかなか動かなかった中身を、トラベル会社とともに動かし始めた。

そのときに地域独自の観光資源を活用した地域の稼げる看板商品の創出ー国土交通省の補助金ー活用から始めたとのことで、タイミング的にもマッチしていたとのこと。その後、観光庁の「インバウンドの地方誘客や消費拡大に向けた観光コンテンツ造成事業」へと広がっている。

福井県は、関西からは近く、比較的海水浴や釣りなどに行く人も多いが、敦賀市はなんとなく通り道という感じのするまち。ここを中心に福井の各市町を周遊できる観光を考えていきたい。今でも、関西圏からの観光が多く、リピーターとして来てもらうためにと、体験観光を広げたいし、福井周遊も考えていきたいということだった。

インバウンド観光が大きくクローズアップされていますが、近くの観光に目が向くような取組も必要。日帰り観光が一泊観光に、体験観光になれば違う広がりも見えてくると思った。

氣比の松原、氣比神宮なども大きな観光資源だと感じた。

◆ 石田 強 委員

《目的》

本視察は、敦賀市におけるエコツーリズムや地域活性化の取組並びに観光推進の先進事例を学び、別府市での地域振興および観光施策に活用することを目的として実施した。

《内容》

敦賀市は「サステナ敦賀」を中心としたエコツーリズムを推進し、観光客と地域住民の双方にとって持続可能な観光スタイルを提案している。主な視察内容は以下のとおり。

○エコツーリズムプログラム

おぼろ昆布の手すき体験

地元産業の伝統技術を活かした体験型プログラムで、観光客が敦賀市の文化を学ぶ機会を提供している。

真鯛の一本釣りと捌き体験

地元の漁業に触れながら、観光客が自然と地域産業への理解を深める内容。

クリーンビーチ活動とアップサイクル体験

環境保全活動の一環として、ビーチクリーンやリサイクル素材を活用したアート制作など、持続可能な観光の意識を高める取組が行われていた。

○新幹線の開通効果と地域経済への影響

新幹線の開通により、敦賀市はアクセスが向上し、観光客の増加が見られた。また、観光客が市内で消費を促進することで、地域経済への波及効果が期待されている。

○地域住民との連携

サステナ敦賀では、地域住民や地元事業者と協力し、観光と住民生活が共存する環境を作り上げている。地元の人々の参加を得ながら、観光と地域活動が一体化して進められている点が印象的だった。

《学びと考察》

視察を通じて、以下の学びと考察を得た。

公共空間の活用による交流促進

まちなかテラスのような公共空間を活用し、地域住民と観光客が自然と集える場を作ることで、地域の交流が深まり、商店街の活性化につながる事が分かった。

地域資源の有効活用

大垣市が「水の都」としての特色を活かし、観光や市民生活に結びつけた取組は、別府市の温泉資源を活用する際の参考になった。地域特有の資源を観光と日常の両面で活用することで、観光客と住民双方にとって魅力的なまちづくりが実現できる。

### 住民参加型のイベント企画

イベントの企画に地域住民が主体的に関わることで、地域への愛着が生まれ、まちづくりに一体感が生まれると感じた。住民主体のイベントが定期的に行われることで、地域内外からの関心が集まり、継続的な活性化が期待できる。

### (7) 視察の様子



リノベーションまちづくりのワークショップ第1回目物件となったカグールにてご説明いただいた

## 2 「まちなかテラス」について

視察先：岐阜県大垣市（大垣市都市計画部都市計画課）

### (1) 概 要

まちの活性化のため、「歩道にカフェを置いて活用したい」、「歩道にベンチを置いてゆっくり滞在できる空間にしたい」など、ニーズに合わせて道路空間を利用しやすくするため、道路法が改正され、新たに「歩行者利便増進道路制度（通称：ほこみち制度）」を創設。

「まちなかテラス（通称：まちテラ）」とは、この「ほこみち制度」に基づき、特定の要件を満たす大垣駅通り等の区域を「歩行者利便増進道路」として指定し、指定区域内の歩道上でのテラス席の設置や物品販売を支援しているほか、駅周辺の広場や公園等でキッチンカーが日常的に出店できるよう支援するなど、まちなかの公共の場所にオープンテラスを設け、「居心地がよく歩きたくなるまちなか」をエリア一体的に推進する取組。

各種道路・公園などの申請を一括して都市計画課が行うことで、スピード感のある対応を可能としている。一方、コロナ禍における商店街の活性化のために新たな取組をしたいと考えていた大垣市商店街振興組合連合会の若手組合員の組織を母体とする（一社）大垣タウンマネジメントが主体となって運営等を行っている。

### (2) 経 緯

令和2年6月、国土交通省がコロナ禍の飲食店支援を目的に道路法の規制を緩和したコロナ占用特例制度をきっかけに、翌月から制度を活用し、駅通りを中心とした道路の歩道の一部を対象に、一定の歩行空間を確保しながらテラス席などを設置できる占用エリアを設ける（占用料の免除あり）。

### (3) まちなかテラスの展開

- 駅から離れた丸の内公園内にてキッチンカーや屋台の販売を行う社会実証実験を実施。好評であったことから、まちなかテラスの実施区域に丸の内公園を追加し、週1回定例開催し現在も継続中
- 大垣駅南街区広場においても、不定期でキッチンカーを呼んで憩いの場の創出を目指している
- 令和3年10月に、まちなかテラスに参加する事業者や大道芸人を大垣公園に集め、来場者に居心地の良い時間を過ごしてもらうための場を創出する「まちテラPARK」を開催
- テラス席の設営撤去等は全て大垣タウンマネジメントが行っている
- まちなかテラスの枠組みを活用した取組として、新たに分散回遊型イベント、まちなかスクエアガーデンを大垣市商店街振興組合連合会が主催し、大垣タウンマネジメントが事務局として参画。また、市の所管は商工観光課であることから都市計画課と部局横断的に実施されている。

#### (4) 水都大垣再生プロジェクト

大垣市の象徴である、水・湧水をさらに魅力あるまちづくりにつなげるため、水都大垣再生プロジェクトを令和5年度よりスタート。「水を見る機会」、「水に触れる機会」を増やすことで、「水都」を感じられる風景を創出することを目指すことにより、水都大垣のイメージアップを図っている。プロジェクト推進に当たって、ハード・ソフト両事業を展開するとともに、全庁的な連携・共創を図るため4つの施策体系に分類して取り組んでいる。

(施策)

##### I 水都を感じるまちづくり

日常生活の中に、「水のある風景」を創る、目に見える形としてのハード整備事業

##### II 水都を楽しむにぎわいづくり

ハード整備事業と合わせて、湧水や川辺といった水圏環境を、もっと積極的に楽しんでもらうためのソフト事業

##### III 水都を生かすものづくり

豊富な地下水を産業資源として、企業誘致に生かすとともに、地下水を活用した新しい特産品、あるいは農産物等の開発・PRを行う

##### IV 水都を引き継ぐ歴史づくり

先人たちが培ってきた、大垣市の「水」を文化資源と捉え、積極的に情報発信するとともに、次世代に引き継いでいく

#### (5) 主な質疑応答

Q1：事業を実施して課題や改善点があれば教えてください。

A1：コロナ禍でのスタートだったことから、起爆剤としては良い策だったが、現在も占用料を免除しているため、このままで良いのかというところが課題。一部周辺自治体（市外）のキッチンカーの出店も許可している。一部事業者のみ優遇して、差を感じる事業者もいるようだ。

Q2：駅を基点ににぎわいを創出されていますが、車で来る人も多いと思います。交通や駐車場の問題は発生していますか。

A2：イベント等を実施すると、来場者の多くが名古屋圏の方。来場者の多くは、混雑を見越して公共交通機関（JRやバス）を利用している。また、市の施設の駐車場を開放したり、最近では民間の駐車場も増えてきており大きな問題は発生していない。現状、コロナ前の人出まで戻ってきていないので、今後、さらに来場者が増えていけば対策が必要になる。現在、駐車場の検証をしている。

Q 3 : 市と大垣タウンマネジメントが協力して事業がスタートしたようですが、もともと協力関係にあったのですか。

A 3 : 昔から大垣タウンマネジメントの母体である商店街振興組合連合会の青年部とのやりとりを密にしていたため、話がスムーズに進んだ。

Q 4 : 湧水を活用した水の販売などはされていますか。

A 4 : 観光協会がミネラルウォーターやお茶、ラムネを販売している。

Q 5 : 回遊性を上げるためにどのような工夫をされていますか。

A 5 : 中心市街地活性化計画に基づいてハード・ソフト事業の両面から事業を行っている。奥の細道むすびの地記念館や大垣城などの点を線で結び回遊してもらえよう策を観光協会と協力して講じており、現在は、文化施設に無料で入館でき、一部店舗でのサービスが受けられる「ぷらっと西美濃通行手形」を販売して、まち歩きに活用してもらおうような工夫をしている。回遊性に加え、どのようにお金を落としてもらえるかを旅行会社と相談しながら進めている。

#### (6) 視察の成果（視察参加者の考察）

##### ◆ 穴井 宏二 委員長

###### 《目的》

コロナ禍において、街や商店街のにぎわいが減少したことにより、それを乗り越え、さらに水都大垣を生かした市民、観光客の回遊性を図るための「まちなかテラス」の取組を調査。

###### 《内容》

令和2年からコロナ禍の折、飲食店を支援する政策としてアーケードの歩道の路上販売などを認め、かつ、出店しやすくするため、道路占用使用料を免除した。また、公園などにも出店を認めた。そのことにより、売り上げも上がり、店舗も増加した。水の都としての「水にふれる、見る、感じる」まちづくりにも取り組んでおり、街中をゆっくり観光できる。

###### 《成果（考察）》

当初は、駅通りの沿道の店舗は12店舗であったが27店舗へ拡大。歩道にお店を出すことで市民にも観光客にも開放感を与えている。何よりも道路占用料などを免除したことが大きいと思う。また、公園でもキッチンカーなどの出店が可能となったことから遠足気分ですっきり過ごせる時間を持ってもらうことは素晴らしい取組である。実施体制としては、一般社団法人大垣タウンマネジメント、商店街連合会、飲食店と市役所担当部署との連携がうまくいっており、いつでも話し合える環境であることが事業の成果をあげているキーポイントである。

◆ 小野 正明 副委員長

まちなかテラスとは、令和2年7月からスタートした事業で市の中心部の活性化とともに市内の「広場」「公園」「水辺」エリア一体的な回遊性を創出する事業である。スタート時はコロナ対策の「3密の回避」として道路使用許可を緩和、また占有料を免除し店舗前の歩道を利用した出店で新たなにぎわいを創出。その後はランチタイムに新たな活気を生むため公園にキッチンカーを出店させるなど「まちテラPARK」を展開。

また、最近は湧水を生かした「水都大垣再生プロジェクト」を始動し、水での町おこしにも取り組んでいる。市内いたるところで湧水がみられ、令和5年度の国交省から表彰される「かわまち大賞」を受賞。市内に本社を置く企業も多く、うち上場企業が8社もあり、市の財政を豊かにしている。夜の街での活気も感じた。

◆ 加藤 信康 委員

コロナ禍で施設内の「密」を避けるための国交省の道路法緩和を上手くまちづくりに活かしていると感じた。また、道路使用許可に関して所管の違う公園や県道含めて一括管理していることは検討に値する。大垣市では事業目的が市民福祉中心とのことであるが、市民の公園など野外でのイベント使用は別府市でも可能だが、商店街アーケード下の恒常的な使用は露天商も多く、商店街の入替わりの激しい別府市では管理上困難と考えられる。

一時的な利用は検討可能と考察する。

◆ 森 大輔 委員

大垣市は水資源豊かなまちとして、水（湧水）を活かした魅力あるまちづくりを進めている。水資源を用いた特に第2次産業振興や企業誘致事業は、本市にない取組で羨ましさを感じる。また、水資源を用いた特産品の創出など新たな企業創業支援など進めているまちなかテラス事業については、コロナ禍で施設内の「密」を避けるため、駅前通りの沿道店舗や広場、公園などでのキッチンカーなどを通して、まちの活性化につなげる活動は検討するに値する取組である。

◆ 美馬 恭子 委員

城下町大垣市を周遊して、体感してもらおう。

街自体広々としていて歩道も広く、テラスとしてお店を出すにも十分なゆとりがあり、市の事業として始めたので、個々の出店者が契約等をせずに市が、県道の使用なども一手に引き受けている。今の時点では出店料も免除されている。これが出店するのにハードルが下がり、テラスとしての出店もしやすい。最初は、市が動き始めたというのが、いろんな意味でメリットとなっているのだろう。今後は、少し考えていきたいとのことだった。

## 水都大垣再生プロジェクト

「湧水のまち」、本当に「水のまち」としてのイメージはあったが、これをどのように生かしていくのか。目に見える水のまちとしての仕組みは、簡単なようで難しいと思う。

「ブランド力の向上は、市民が大垣に住み続けたいと思えるまちづくり」本当にそうだと思った。観光は大事。しかし、住んでいる住民がどれだけまちを愛しているかということも大事。川に沿って、桜並木・ライトアップ・船下りなど市民に身近な場所作りが大切だと感じた。

まちなかでのイベントは、今のところ車が混雑して大変とまでは行っていないようだが、今後広がっていく中ではその点も考えていくことが必要だとのことだった。

大垣市は、中部地区の中でも交通の拠点ともいえる。この位置を生かして、まちに更なる活気と発展をとることだった。

まちの活性化、観光に目を向けるとき、このまちには何があり何に目を向けるか。そして、ただ広げるのではなくまちを愛し、住み続けることができるまちづくりこそが大切だと思った。

### ◆ 石田 強 委員

#### 《目的》

本視察は、大垣市が行っている市街地活性化や観光資源の有効活用、地域の交流促進施策を学び、別府市の地域振興・観光施策に活用することを目的とした。特に「まちなかテラス」など、地域住民や観光客の交流の場づくりを進める取組に注目した。

#### 《内容》

##### まちなかテラスの取組

「まちなかテラス」は、市民と観光客が集まれる公共空間を提供し、地元の飲食店や商店と連携したイベントやマルシェを定期的で開催している。屋外のテーブルや椅子、シェードを活用した開放的なスペースが用意され、季節に合わせたテーマの催しが行われていた。

##### 地域資源の活用と観光施策

大垣市は「水の都」として知られ、市内の水路や湧水を活かした観光プログラムが充実している。観光客向けに船上から市内を巡る「水の都・大垣船めぐり」や、水の景観を活かしたガイドツアーも提供されており、地元の自然資源を巧みに利用している点が印象的だった。

##### 地域住民との連携とイベントの開催

まちなかテラスでは、地元商店街や住民の協力を得て定期的にイベントを実施し、地域の活気を生み出している。また、ワークショップや音楽イベントなど、住民が主体的に参加できるイベントが数多く企画されており、住民が地域づくりに関わる機会が提供されている。

#### 《学びと考察》

今回の視察をもとに、以下の活用案を検討する。

### 温泉街の「まちなかテラス」構想

別府市内の温泉街や駅周辺に開放的な公共空間を整備し、観光客と市民が集える「まちなかテラス」を設置することを検討する。季節ごとのテーマに沿ったイベントや、地元飲食店の出店を行うことで、地域の魅力を発信する。

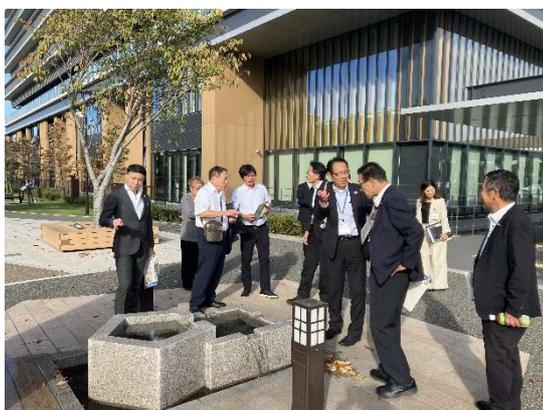
### 温泉を活かした観光プログラム

大垣市の「水の都」を活かした観光施策に倣い、温泉を活用したガイドツアーや体験プログラムを提供する。別府市内の温泉施設や観光スポットを巡るツアー、地元の歴史や文化を学べるガイド付き体験の導入が効果的。

### 地域住民の参加を促進するイベント

地元住民が主体的に参加できるワークショップやマルシェ、音楽イベントを定期的に行う。地元の学生やアーティストの参加も促し、観光と地域文化の交流を促進する。

## (7) 視察の様子



まちなかテラス対象区域の丸の内公園等を現地視察



担当課である都市計画課より説明を受ける様子